Atsuko Kudo Mail Magazine 215

2015.08.14 Tsudoi2015 - Czech

お元気でいらっしゃいますか？

７月 29 日～8 月 2 日、ヤン・フス殉教 600 年を記念するチェコのプラハで開催された『第 32 回ヨーロッパ・キリスト者の集い』を、大きな祝福のうちに終えることができました。「すべての人に真実を」のテーマのもと、欧州各国を始め、日本、アフリカ、イスラエル、東南アジア、ブラジルなどからも約 250 人が集まり、みことば、賛美、分かち合いと素晴らしい 5 日間を過ごしました。

今年も賛美チームのスタッフとして奉仕させていただきました。各講演会の賛美奉仕のほか、金曜日の夜に行われた「賛美の夕べ」では、ヤン・フス殉教 600 年を記念し、「信仰のバトン」“フス（14～15 世紀）→ルター（16 世紀）→ツィンツェンドルフ（18 世紀）→ウェスレー（18 世紀)” をテーマに賛美のプログラムを組みました。

プログラムのいくつかの賛美歌に関しては別の機会にご紹介させていただこうと思っています。今回は、長くなりますが、ヤン・フスからウェスレーまでどのように信仰が受け継がれてきたかをお分かちさせていただきたいと思います。（写真：フスがチェコ語で説教をした「ベツレヘム礼拝堂」での礼拝）

●信仰のバトン

イエスは、ローマ帝国が地中海沿岸の国々を制覇して世界最高の権力をふるい、人々が偶像礼拝と享楽に生きていた霊的暗黒の時代、私たちを暗闇の世界から救い出すために、ローマの支配下にあった神の契約の地イスラエルに生まれてくださいました。イエスの昇天後、迫害され散らされた使徒たちによって、福音は、最も霊的な暗黒の地であるアジア・ヨーロッパに伝えられて行きました。そして、ローマ帝国の中心地であったローマに、後にヨーロッパ中を支配することになる教会の柱が据えられました。

国教化されたキリスト教会は国の権力と絡み合い、10 世紀から、ヨーロッパの広範囲にわたって「神聖ローマ帝国」が打ち建てられて行きました。14 世紀、チェコの首都プラハは、その「神聖ローマ帝国」の首都として栄えました。しかし、神の真実は、この世の権力と絡み合って曲げられ、歪められていきました。

☙フス

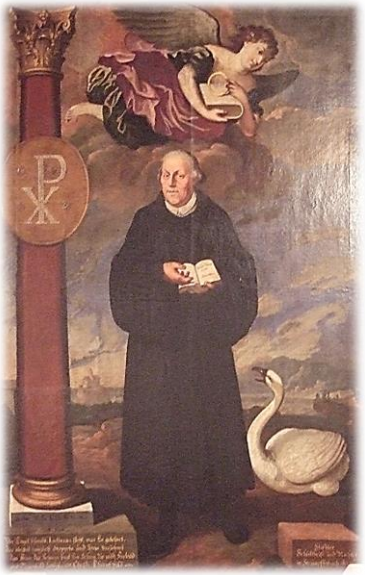
そのような中、神のことばに従おうとする宗教改革者が現れるようになりました。そのひとりがイギリスのジョン・ウィクリフ（1320～1384.12.31）でした。そして、彼の影響を受けた、当時、プラハ大学の総長であり説教者であったヤン・フス（1369~1415.7.6）は、それまでラテン語で語られていた難解な説教ではなく、会衆が理解できるチェコ語の説教をし、自国語で賛美すること、会衆が同じ旋律をユニゾンで歌うことを奨励しました。（写真：プラハ旧市街広場のフス像）

1415 年、フスは、教会の改革を呼びかけようとドイツ南部のコンスタンツで開かれた国際宗教会議に参加します。しかし、到着するや否や逮捕され、異端の罪で審問されたあげく、火刑に処せられました。

火刑の場で、死刑執行人がフスの衣類を脱がし、両手を後ろ手に縛り、首を柱に結び付け、彼の首の高さまで薪とわらを積み上げた時、皇帝の家臣は、フスに主張を撤回して命乞いするように勧めました。 しかしフスは、「私が、間違った証言者に告発されたような教えを説いていないことは、神が知っておられる。私が書き、教え、広めた神の言葉の真実とともに、私は喜んで死のう」と述べて断りました。そして、フスは、詩篇を朗読しながら息絶えて行ったと言われています。

☙ルター

火刑の際、フスは、「あなたがたは、このガチョウ（Hus はガチョウ）を丸焼きにするだろうが、100 年後には白鳥となってよみがえるだろう」と言ったという逸話が残されています。そして、彼の殉教の約 100 年後の 1517 年、マルティン・ルターがヴィッテンベルクの城教会に 95 か条の提題を打ち付けたことを機に宗教改革が起こりました。それゆえ、ルターのシンボルは白鳥です。



フスとルターの共通点は、信仰だけでなく、ふたりとも美声の持ち主であったことです。ルターも、フス同様、自ら自国語で讃美歌を作り、教会の賛美を燃え立たせました。

最も有名なものが、詩篇 46 篇から作られた「神はわがやぐら」です。この曲は、ルターが最も苦難の中にいた時に、敵にキリストの勝利を宣言するために作られた曲だと言われています。パウロがエペソ人への手紙 6 章で語ったように、私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天にいるもろもろの悪霊に対するものなのです。

ボヘミア兄弟団

ヤン・フスの死後、チェコにはフスの教えに追従するフス派の人々が、真実の信仰を求めて戦うようになりました。40 年の長い戦いの時を経て、ヘルチツキーという人が、武器を取ることに反対し、政治と縁を切って、都会を離れ、クンヴァルトという村で畑を耕しながら独自の信仰共同体を形成しました。これが『ボヘミア兄弟団』の始まりです。『ボヘミア兄弟団』は、中世最大の異端と呼ばれたワルドー派を受け入れました。

（絵：反フス派の攻撃に倒れた人を抱きながら、こぶしを上げて復讐を誓う青年に、「悪をもって悪に報いてはいけない。それでは世界の悪は増大して終わることはない」と諭すヘルチツキー）

ワルドー派

ワルドー派とは、聖書に回帰する生き方を説いたリヨンのピエール・ワルドー(1140～1218?）によって始まりました。この派は、何世紀もの間、大きな迫害を受けてきました。

２０世紀に入り、やっとワルドー派の教会が認められるようになりました。今年の６月 22 日には、イタリア北部の都市トリノを訪問中のローマ法王フランシスコが、市内のプロテスタント・ワルドー派（イタリア語ではヴァルデーゼ）の寺院を訪れ、カトリック教会が何世紀にもわたって同派を迫害したことをローマ法王として初めて謝罪しました。ちなみに、ミラノで韓国語・日本語礼拝が行われている「賛美教会」は、ワルドー派の教会をお借りして、礼拝を守っておられます。

ツィンツェンドルフ（モラヴィア兄弟団）

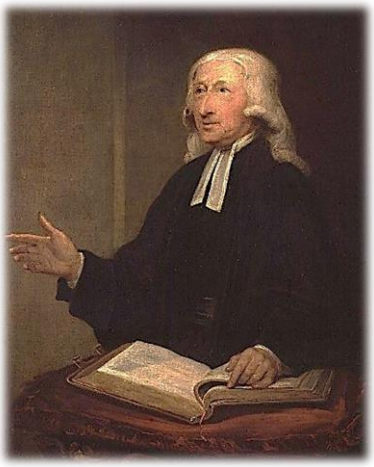
『ボヘミア兄弟団』はその後、迫害を受け、ヨーロッパ各地に離散するようになりました。1722 年、『ボヘミア兄弟団』の一群が、現在のドイツのザクセン州にあるツィンツェンドルフ伯爵に保護を求めてきました。ツィンツェンドルフは、プラハから 150km の距離の自分の領地に彼らを受け入れました。ここには『ボヘミア兄弟団』だけでなく、迫害を受けたさまざまな宗派の人々が逃れて来ました。

ツィンツェンドルフは、この地をヘルンフート（主の守り）と名付けました。これが、『モラヴィア兄弟』の始まりです。ツィンツェンドルフ伯は大変霊に溢れた人物で、2000 にも及ぶ賛美歌を作りました。

1927 年 8 月 13 日の聖餐式の時、ヘルンフートの住民にペンテコステの日のような霊が降り注ぎました。それまで互いに仲たがいしていた各宗派が、涙を流して和解し合ったのです。そして、この『モラヴィア兄弟団』から、世界中に宣教師が派遣されるようになりました。

ヘルンフートの『モラヴィア兄弟』は、24 時間連鎖祈祷を続けました。その連鎖祈祷は、何と、100 年もの間途絶えることがありませんでした。その後、イギリス、アメリカで霊的リバイバルが起きたのは、ヘルンフートの 100 年にも及ぶ祈りがあったからなのです。

❧ウェスレー（メソジスト運動）



イギリスのジョン・ウェスレー、チャールズ・ウェスレー兄弟は、宣教のために渡米する船で『モラヴィア兄弟団』に出会いました。そして、嵐で沈没しそうになる船の中で、死をも怖れず神を賛美する彼らの姿に圧倒されるのです。のちにイギリスに戻ったウェスレー兄弟は、やはり『モラヴィア兄弟団』の宣教師の説教を通して霊的覚醒を受け、メソジスト運動が拡大して行きました。

ちなみに、6 月に奉仕させていただいた北米ホーリネス教団の夏期修養会では、講師の藤本満先生が、ウェスレーまで遡って、「きよめ派」の信仰の歩みを説明してくださいました。今回のチェコの集いでは、ウェスレーの信仰が、フスの信仰を継承したモラヴィア兄弟団にあること、さらには、フスに大きな影響を与えたジョン・ウィクリフにまで繋げられていることが分かりました。

弟のチャールズ・ウェスレーは 6500 もの讃美歌を書きました。彼は、『モラヴィア兄弟団』の宣教師ピーター・ボルロが、「兄弟よ、もし私に一万の口（舌）があったならば、私のその一万全部を使って神をたたえます」と言うのを聞いて、電気にでも打たれたかのように熱い情熱がこみ上げてくるのを感じたそうです。その時に一気に書き上げたのが、彼の最も有名な讃美歌のひとつ、「世にある限りのことばをもて」という賛美歌でした。

History は His Story、「神の歴史」です。暗闇の中に、父なる神は光なる御子を送ってくださいました。このイエスは、私たちを暗闇の圧制から救い出すために十字架にかかり、その尊いいのちを捧げてくださいました。そして、キリストに従う光の子たちに、その輝く金の糸を繋ぐ使命を与えてくださいました。

「賛美の夕べ」では、ミュンヘン日本語教会の安藤廣之牧師が、「真実のバトン」と題して大切なメッセージを語ってくださいました。私たちは、教理ではなく、先人たちが勇気をもって伝えた真理のバトンを受け継いで行かなければなりません。どうか、全能なる主が、弱い私たちに、死に至るまで忠実に従い通すことのできる信仰を与えてくださいますように！

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。（ヘブル 12:1）

～～～